

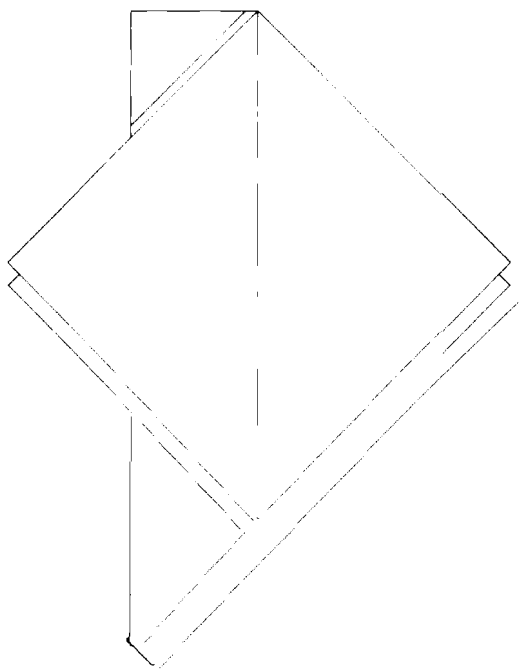
寿岳章子 著

日本人の名前

大修館書店

日本人の 名前

寿岳章子 著



大修館書店

●著者略歴

寿岳章子（じゅがく あきこ）

1924年 京都市に生まれる

1946年 東北大学法文学部卒業

元京都府立大学教授

著 書 『レトリック』1966年（共文社）、『女は生きる』1968年（三省堂新書）、『働く婦人の人間関係』1972年（汐文社）、『日本語の裏方』1978年（講談社）

日本人の名前

© A. Jugaku 1979

1979年4月1日	初版発行	定価 1,340円
1990年4月1日	新装版 初版発行	（本体1,301円 税39円）

検 印	著 者	寿岳 章子
省 略	発行者	鈴木 荘夫

発行所 株式会社 大修館書店

（101）東京都千代田区神田錦町3-24

電話 03（294）2221（大代表）／振替 東京9-40504

印刷／壮光舎 製本／関山製本
ISBN4-469-22072-8 Printed in Japan

目

次

序 章

エピソード1 3

エピソード2 5

エピソード3 6

I 人にとって名とはなにか——日本人の場合

第一章 人生とのかかわり 11

第二章 惨苦の生涯のあかしとしての名 23

第三章 名の恨み 29

第四章 女性史と名 35

第五章 名こそ人 57

Ⅱ 名の構造と機能

第一章	名もまた言語——その構造及び機能	99
第二章	名からの発信、その情報	108
第三章	名のみだし機能	121
第四章	言語としての名の要素	145
第五章	名前の型	177

Ⅲ 名づけ行動の広がり

第一章	複数の名——あだななど	195
第二章	名づけぐらし	210
第三章	何にでも名をつける	226
あとがき		252

序章

●エピソード 1

友人たちとにぎやかにタクシーに乗った。一人がやがて山に出かけて行くとあって、年がいもなく皆が騒いでいるのを、その運転手は、水をかけるようなことばかり言う。それがまたおもしろくて、さらに皆がへらず口をたたくというような具合で、車の中の人間たちはひどくご機嫌であった。

そのうち、ふっと私はこんな愉快なことを言う人はどんな名前の人かなあと思い、車内の名札を眺めた。「瀬川京錫」とある。なんとおもしろい名、と瞬間私は思い、意を決してその人に聞いてみた。あなたのお名前は、あんまり見ない名だけど、なんとお読みするのですかと。

もともとひょうきんそうなその人は、ちゃんと読めたらタクシー代ただにしますなどとふざけて答える。さあ、音読か訓読かわからん、音読ならキョウシヤクやけど、変わった名前ですなあと私がいう。その人は、ただにするのやめたとのたまう。当りである。これまでになんと読んだ人は、漢文の先生とかいう人が一人だけ、あとはキョウエキなんていう人がいると運転手さんは言いついだ。キョウシヤクでいいなら、これは簡単な話である。漢文の先生に私だつて負けてなるものかということになる。あとは誰がその名をつけたか……おじいさん……随分凝った名をつける人やなあ、教養のある人でしたんやなあ……いや、それ程のこともないけど遊び人でしたわ、どういうわけかこの「錫」という字が好きで、兄には「君錫」弟は「勇錫」言いまんねん、私は兄の名が好きですわと話は止めどもなく弾むうちに車は目的地に着いた。降りてから、私たちは当分名前の話をして時がたったことであつた。

たしかに人名漢字としては「錫」という字はあまり使われない。私などはこの字から色濃く仏教的なものを感じとつてしまふが、さて、そのお祖父さんはどうしてこの「錫」という字が好きだったのだろう。一個の字を執拗に孫三人につけるといふのはどんな思い入れがあつたのだろうか、いろいろ想像することが可能である。そのうちにはそのおじいさんの顔つきまで浮かび上がるような錯覚さえ持つことができそうである。

●エピソード 2

ある日、ある時間のテレビ番組。

しろうとの芸自慢が集まって審査員の前でいろいろな芸を披露して点数をつけてもらい、ここにこする番組である。一人のおばあさんが出て来た。お名前はと司会者がたずねた。「なんとかカメノでございます」とその人は答えてから、誰もなにも言わないうちに急に注釈を加えた。「カメノ言いますねん、けつたいな名前どっしゃろ、昔の名前でなあ」という次第である。その人の名前は、「カメノ」であった。その発言を聞いて、私は心をとぎめかした。ここにまた名前のある種類のものについての特有のコメントがあるのだ。これまでに私はたびたび触れてきたが、この「カメ」ということばを使った名前は、日本の名前の歴史である種の問題をもっている。現代ではこのような注釈を加えねばならぬこの種の名前は、かつては実に平凡な性格をもっていた。ツル、クマ、トラなどと並んでカメは男にも女にも大切な名前用のことばであった。ところが現代、ことに戦後ではこの「カメ」はまったく名前の原型としては魅力を持たれなくなった。一般に動物の名は敬遠されている中でも「カメ」はまずい。動物の中でもまだツルとか、リュウとか、コマとかだとまだしもであらう。しかし、カメと言えば現

実のあの爬虫類のカメの姿が眼前にちらついて、あまりにもなまなましくあり過ぎるのである。
う。

それにしても、誰もなんにもまだ言わない先にコメントの先取りをし、質問を封じるこの女性の行動はどのようにして形成されたかということを考えるといろいろなものを思わされる。

●エピソード 3

一九七八年の京都府知事選挙。政治的にはいろいろの意味があり、この選挙でおもしろかったのはそれぞれの候補者について名前語りがハデハデシクなされたことであった。杉村、山田、林田と並んだ候補者の姓を利用していろいろなことが語られた。名前と本人との絶対的な必然の結びつきなどなんにもないと言うことが、おそらく人々にはよくわかっていながら、人は名前談義に身を入れていた。いわく、田んぼには人は住まない、村にこそ人は住む、いわく、杉のごとく真直ぐなこの人……杉と言う名前だからとて必ずしも心も直ぐであるとは限らないのだが、京都の場合、偶然にも杉の名がついた人は、まことにその感じを湛えていたのだ、皆は植物の杉と本人のパーソナリティとを結びつけることに熱中した。どこかそういう発想の論理性には、おかしげなことがあることを承知の上で、皆はむしろ遊びさえした。杉のシ

ールもできた。次のように。



身辺の些々たることを取り上げても、このように名前をめぐる人の心の動きがある。そしてそれらの物語は、案外大切な事柄を含んでいる。日本人……日本語……名前。この三つの項の結びつきは、意外にたしかな内容を含む。今上げた、たった三つのエピソードだけでも次のような問題が含まれるであろう。

すなわち、日本人にとって名づけとはなにであるのか、親がわが子にどんな思いで名を与えたのか、その名をつけられたこどもは、どのように思うのかなどの、いわば言語生活的な視野での名づけの問題。あるいは名前と本人の関係は、必然的な意味では、もちろんなんにもないはずであるが、それにもかかわらず、現実にはなんと関係深く存在することか。名前とは、と

うてい単なる符号などではなさそうである。

さらにもっと高いところから俯瞰図を作れば、日本人の名についてのいろいろな特異性の問題、そして日本内部において、歴史的にどんな意味あいをもつてどう変ってきたか。

所詮名というものはことばの一種に違いない。そうして、ある手がかり、すなわち、品詞論的な面からは、単に固有名詞というだけでおわってしまうのであるけれども、それ以外には、ことばの中でも、もっともことばがあらわす意味の世界との特異な結びつきをしていると思われる。人間という摩訶不思議な存在。百人いれば百人だけの個性、そしてだれひとり同じでない暮らしざま、そのホモ・サピエンス的な世界外のことを、名前が背負っている。あまりにも広い責任である。だから人は、自分の名前についてケロッとはしていられない。名について、とりわけ日本人は常に多彩な思いめぐらしをおこなってきた。日本人の名について考えることは、広く言語一般の視野における名の問題にふれるのに好都合であると言えよう。この書では一切ではなく、部分的にでも日本人の名の負う問題を考えてみたい。

I

人にとって名とはなにか

——日本人の場合

第一章 人生とのかかわり

さきに芸自慢で「カメ」という名をもっている女性が、聞かれもしないうちから、「けったいな名前どっしゃろ。」とみずから註を加えている話を紹介した。この「カメ」という名について、すでにたびたび論述しているので、ここでは詳細を省くが、とにかく「ハナ」とか「ヒサ」とかいう名と違って、コメントをしないことには、なんだか具合が悪い名であるからこそ、このおばあさんは先制攻撃をかけたに違いない。はきはきした気持のいいおばあさんであっただけに、私はこの人の気持が大変よくわかるような気がする。

つまり、しょっちゅうおもしろい名ですねと言われているのである。言う人はどちらかというと、「おかしな名ですね。」と言いたいところであろうが、それは遠慮して、おもしろい

名とか、変わった名とかいう表現で、おかしがつている自分の氣持を表現したに違いない。

この喜寿に達した女性は、あまりそのことをよく言われるがため、自分の方でさきに予測されるかも知れない会話の先取りをしたのである。さすが芸自慢に七十七歳で出ようというほどの進取の氣性に富んだ人であるから、その言い方には毛頭妙にクヨクヨしている氣配はなかった。サバサバとしたものである。

しかし、「カメ」という名であるがために、毎日毎日クヨクヨしている人もある。だいぶん前のことであるが、私の母が読売新聞の身の上相談を受持っていたとき、次のような文面の相談がまわってきた。

二十八歳の未婚女性です。いままで何度も結婚話があつたのですが、いつも最後になって名前がおかしいからとまとまりませんでした。わたしの名前はカメ子というのです。この名前のために若いころ自殺未遂で親を心配させたこともありました。ある人と知り合い愛するようになったのに、その人は親にわたしの名前をどうしてもいえないといってわたしから離れていったのです。一生わたしから離れないこの名前のために恋愛もできないのかと、一時は親を恨みましたが、もう結婚の夢をみることなく一生独身で過ごすとうとあきらめていました。働く意欲もなくなり、独断で会社をやめ、いまひとりでアパー